各部局等における教員個人評価の集計・分析並びに自己点検評価（平成２２年度）

留学生センター

１．個人評価の実施状況

１）対象職員数

留学生センター教員数　７名

個人評価実施者数　　６名

実施率　８６％

（平成２３年３月３１日付けで１名退職による）

２）教員個人評価の実施概要（評価組織の構成、実施内容、方法など）

・留学生センター各教員は、年度個人目標申請書、活動実績報告書を提出した。

・ 留学生センター長は各教員の提出書類をもとに評価し、各個人評価概要を各教員に渡した。

・各教員は評価結果について留学生センター長に質問可能とした。

・各教員は、教育関連、学術・研究関連、国際交流・社会貢献、組織運営について全体活動に対するそれぞれの重みを付けた。個々の事項について評価した。ただし、５段階による達成度の評価はしなかった。

２．評価領域（教育関連、学術・研究関連、国際交流・社会貢献、組織運営）別の集計・分析と自己点検評価

Ⅰ．教育関連の領域

１） 評価項目（A）担当授業科目、B）日本語コースのコーディネート、C）教育プログラムの運営業務、D)学生相談、E）その他、および学生引率、支援活動など、F)教育向上のための研修会等への参加）ごとの実績集計と分析

A）担当授業科目

各教員は、留学生センター、教養教育、学部、大学院の授業を、毎週７～８コマ担当した。

B）日本語コースのコーディネート

前学期は６名の教員、後学期は７名の教員が、教養教育日本語、短期留学プログラム（ＳＰＡＣＥ）、日本語・日本文化研修プログラム、日本語研修コースのコーディネートに加え、レベル１～６の日本語コースおよびリメディアルコース、教養教育日本語のコーディネートを行った。

各教員の担当はそれぞれ次のとおりである。

Ｊ１００（初級前半）：古賀、Ｊ２００（初級後半）：前学期は横溝、後学期は吉川、Ｊ３００（初中級）：丹羽、Ｊ４００（中級）：中山、Ｊ６００（上級）：横溝、リメディアル（初級前半～初中級）：山田、教養教育日本語：中山

C）教育プログラムの運営業務

・各教員は、それぞれが担当する、以下のコースの運営にかかわる業務を行った。

―日本語研修コース、ＳＰＡＣＥ、日本語・日本文化研修プログラム

日本語教師養成コース

業務には、募集要項の作成、日本語コース受講案内の作成、プレースメントテストの作成および実施、日本語コースのオリエンテーションの実施、非常勤講師への連絡、留学生のチューターに対するオリエンテーションでの説明、などがある。

D)学生相談

・オフィスアワーの時間（毎週１コマ）に加え、学生相談の時間を、各教員が毎週１コマ設定し、学生に周知している。

・すべての教員が、オフィスアワーの時間外にも相談に応じている。

Ｅ）その他、および学生引率、支援活動など

・２名が、ＳＰＡＣＥ・研修コースの学生のための学外研修を、年に４回、企画し、学生の引率をした。

・１名が沖縄への留学生見学旅行の引率をした。

・１名が新たに北海道へのスタディーツアーを企画立案し、１０回の勉強会をコーディネートした後、引率をした。

・１名が、台湾・高雄市にある文藻外国語学院で開催された日本語教育実習の引率・指導をした。

F）教育向上のための研修会等への参加

・教員は各自で日本語教育研修会等に参加し、自己研鑽に努めている。

２） 教育関連の領域における教員の活動評価集計と分析

教養教育科目（前学期は日本語Ⅰ、後学期は日本語Ⅱ）３クラス（週２コマ）と、レベル１～６の日本語コースおよびリメディアルコースの授業が行われた。Ｊ１００（初級前半）前学期は１クラス、後学期は２クラス（週６コマ）、Ｊ２００（初級後半）前・後学期ともに１クラス（週６コマ）、Ｊ３００（初中級）前・後学期ともに２クラス（週６コマ）、Ｊ４００（中級）４クラス（うち１クラスは週２コマ）、Ｊ５００（中上級）３クラス（うち１クラスは週２コマ）、Ｊ６００（上級）３クラス（うち１クラスは週２コマ）、リメディアル（初級前半～初中級）１３クラス）が開講された。

３） 教育関連の領域における部局等に自己点検評価（例：①部局等の教員活動の現状、②優れた活動、③問題点、④改善目標など。）

①部局等の教員活動の現状

週７～８コマの講義を担当している。

②優れた活動

・学習者のレベルに応じてきめ細やかな講義が実施されている。また、どのレベルでも、学生の積極的な参加を促すような授業を実現することにより、言語運用が実践されている。

・成績評価は細部にわたり具体的な項目をあげて実施されている。例えば、従来の出席、小テストならびに期末試験の他、宿題の提出状況や授業参加度も点数化されている。

・学習者の理解度、学習態度に応じた講義がなされている。

・初級レベルから、日本人学生と留学生との混在授業（ビジターセッション）が行われ、上級レベルのクラスは、留学生だけでなく、日本人学生にも開講し、インターフェイス授業となっている。

・すべての教員が、オフィスアワーおよび相談の時間外にも、学生の相談に応じている。

・様々な学外研修およびスタディツアーを企画し、学生を引率し、留学生と日本人学生の相互交流を促進している。

・日本語教育学会第１回研究集会（九州大会）をはじめて佐賀大学で開催した。全教員がその準備をし、当日は研究集会に参加した。

・全教員が、各自で日本語教育研修会等に参加し、自己研鑽に努めている。

・リメディアルの会話クラス、漢字クラスでは、プレースメントテストによるクラス分けで、うまくプレースされていないケースが見られたため、クラスの特徴に応じた独自のプレースメントをさらに行うことが、昨年度の改善目標であった。今年度は早速、授業内容を反映した独自のテストを実施してクラス分けを行った。

・教養教育科目においても、授業内容を反映した独自のプレースメントテストを開発し、クラス分けを行った。

③問題点

・レベル間で学生数に偏りが生じている。

・非漢字圏の学習者は、漢字能力が低いため、上のレベルのコースにおいて読解などの授業で困難をおぼえることがある。

・研究が忙しく、日本語学習の必要性は感じながらも、十分授業に出席できず、ついてこられなくなる学生がいる。直接の研究では日本語を必要としないかもしれないが、研究室などでのコミュニケーションにはやはり日本語が必要であろうから、そのような学生が参加できるような工夫が必要である。具体的には、初級レベルは現在週６コマとらなければならないが、コマ数を減らして、その分、時間をかけて初級を終えるようなコースを設定することなど

が考えられる。

④改善目標など

・プレースメントテストの後、実際の授業内容のレベルにあわない学生が散見されるため、プレースメントテストの見直す必要があろう。

・③の問題点で指摘した、日本語学習にあまり時間をさけない学生のニーズに対応できるようなコースのデザインを考えたい。

Ⅱ．学術・研究関連の領域

1）評価項目ごとの実績集計と分析

⑴ 著書の出版　３

⑵ 学術誌掲載　１２

⑶ 学会、講演等における発表

国外　３

国内　１４

⑷ 学会出席

国外　４

国内　２０

⑸ 研修会参加　１７

⑹ 外部資金等

不採択　７

採択　　４（研究代表者１、分担者２、協力者１）

⑺ 共同研究　６

⑻ その他　２

2）学術・研究関連の領域における教員の活動評価集計と分析

①著書および学術論文の発表数は１５件あり、研究活動は活発と言えよう。

②学会、講演等における発表は１７件あり、多いといえる。

③学会への出席も多い。特に、国内の学会への出席は２０件あり、多いといえる。

④研修会への参加も１７件あり、多いといえる。

⑤外部資金については、全員がまず研究代表者として科研費を申請している。さらに、研究分担者・研究協力者としても申請している。ただし、採択率は１１分の４で良いとはいえないので、採択されるような研究をしていく必要があるだろう。

⑥共同研究は６件あり、学外の研究者と共同しての研究活動も活発に行われているといえる。

３）学術・研究関連の領域における部局等の自己点検評価

①研究活動の実績は、前年度に比べると増えており、その点は評価できる。今後は、外部資金のより一層の獲得が望まれる。

②留学生センターは、佐賀大学で唯一外国人を対象とした教育研究施設であり、その特色と機能を十分発揮する必要がある。日本語教育は充実してきているので、今後は、研究面において、各教員がそれぞれの個性ある研究を活かすことで、留学生教育における種々の分野の研究（異文化交流、留学生に特有の生活上の悩み相談など）が出てくるとよいだろう。

Ⅲ．国際交流・社会貢献の領域

１）評価項目ごとの実績集計と分析

A）国際交流活動の運営・参加

・留学生の受入と派遣は留学生センターの業務の１つであり、各教員は、国際学会への参加、外国の大学での専門的知識の教授、協定校への留学生の派遣と受入に関する学生相談などを実施している。

・留学生センター留学生指導担当研究協議会へ参加している。

・国際交流を目的としたイベントの企画・支援をし、留学生をイベントに引率している。

・留学報告会を実施し、本学の学生の海外の提携校への留学が増えるよう、情報提供を行った。

B）その他の活動

・社会貢献として、地域の小中学校の英語教育のコーディネーターをつとめたり、外部評価委員として、貢献している。

・他大学の留学生教育機関を訪問し、スタディーツアーの協同事業計画について検討を行っている。

２）国際・社会貢献の領域における教員の活動評価集計と分析

・留学生センターは国際交流と切り離せないので、全員、国際交流に関する業務にたずさわっている。

・留学生の地域とのつながりは欠かせないので、地域が主催する交流イベント（例：スタンプラリーin 吉野ヶ里）にも留学生とともに参加をしている。

３）国際・社会貢献の領域における部局等の自己点検評価

・外国での日本留学フェアへ参加し、佐賀大学への留学を呼びかけてきたが、成果があまり上がっていなかったため、今年度からは日本留学フェアへの

参加を取りやめた。現在、別の方策を探っているところである。

・毎年、留学報告会を実施してきているが、今年度は、報告会の場で、留学帰国者の発表の後、国ごとのテーブルを設けて、海外の提携校のより詳しい情報を提供できるように工夫した。

Ⅳ．組織運営の領域

1）評価項目ごとの実績集計と分析

A）全学委員会、ワーキンググループ等の委員としての実績

各教員は、留学生センターや全学の委員会に分担して参加し、協力している。

・全学委員会

留学生センター運営委員会、全学教養教育機構、評価委員会、人事制度委員会、人文系学部・大学院改組検討委員会、学生委員会、男女共同参画推進委員会、広報室会議、ハラスメント委員会、佐賀大学国際戦略構想検討委員会等

・ワーキンググループ等

佐賀大学国際化ワーキンググループ、佐賀大学国際戦略構想部会、大学院構想ワーキンググループ、ハノイ国家大学ツイニングプログラム計画ワーキンググループ、卒業留学生ネットワークワーキンググループ、安全保障貿易管理体制整備ワーキンググループ等

B）センター内の委員としての実績

各教員は、留学生センター内の必要な業務を分担して担当している。

紀要編集、「留学生センターニュース」の発行、ホームページの作成・管理、ネットワーク管理、派遣留学生や奨学金受給者の面接、図書・備品管理等

C）センター広報活動に関する実績

各教員は、留学生センターの広報活動に関する業務を分担して担当している。

佐賀大学に関する海外からの問い合わせへの応対、ＳＰＡＣＥの広報、ホームページを通しての情報発信等

D）大学や部局が開催する行事への参加

全教員が、ＳＰＡＣＥの入学式および修了式、新入留学生オリエンテーションに出席している。また、新入留学生歓迎会やハロウィーンパーティーなどの留学生が関わるイベント、さらに、教養教育機構のＦＤフォーラムにも参加している。

今年度は留学生センター１０周年の年であり、全教員が「佐賀大学留学生センター設置１０周年記念式典」に出席した。

２）組織運営の領域における教員の活動評価集計と分析

上記の通り、各教員は分担して、センター内の委員、全学委員を担当している。

３）組織運営の領域における部局等の自己点検評価

留学生センター教員数が少ないので、全ての全学委員を担当することは不可能である。しかし、留学生センターと関わりが深いと思われる委員会には参加している。

ホームページは３か国語（英語、中国語、韓国語）対応にし、英語が苦手な留学生への情報提供が可能になった。

３．教員の総合的活動状況評価の集計・分析と自己点検評価

１）総合的な集計・分析結果と部局等の自己点検評価

少ない教員で留学生センターとしての多くのプログラムを運営している。実施しているプログラム数は大規模大学と遜色ない。昨年度後学期から、Can Do（何ができるようになるのかを示す）に基づいた新カリキュラムを実施し、初級から上級レベルまでの、アカデミックジャパニーズを目指しているが、受講者数および学生の学習状況を見て、それぞれのクラスのシラバスやカリキュラムの改善を行い、より良い教育を提供できるよう、常に努力を続けている。

今後の課題としては、外国人のための短期語学研修プログラムの開発などがある。

２）個人評価に関する構成員からの意見を調査している場合は、まとめたものを添付する。

(1)評価結果を各教員に渡し、それについて教員から意見があれば聞くようにしている。

(2)次年度の個人評価実施に向けての改善案が策定されていれば、それも記載する。

(3)次の改善を行う必要がある。

①科研費の申請が１００％であることを、全教員に対して確認した。

②人数が少ないので統計的な集計は不可能であった。個々のデータの羅列に終わった。

（4）段階評価試行結果の結果（意義、有効性、活用方法などに関して）及びこれに代わる総合的活動状況評価の集計・分析方法の提案など

①各自が目標を立てて、それについて自己点検することは教育・研究など各領域の改善に役立つと考えられる。

②平成２２年度、留学生センターは外部評価を受けた。